

「人生の下り坂における取捨選択」

先進理工系科学研究科 久米 晶子

「好奇心や使命感などの強いモチベーションに突き動かされるように行動した結果、道が拓けた。」という話は人を感動させ、エネルギーを分け与えてくれる。一面、自身の内部に多くの原資を持っている者は、多くのリターンを受けるというわかりやすい話でもある。

実際には研究者は強いストレスに晒されている。

「〇〇歳までに〇〇しておかないと行き詰る」

「手間はかかるが評価されない雑用に追われる」

「疲れて何もやりたくない」

「本音を言うと居場所を取り上げられる」

という状態になるかもしれない（結構なる）。つまり不安なのである。

年を取ることは物理的にあきらめたり、手放したりということを余儀なくされる。しかし何を手放すかということは我々の選択の内にあり、多くの気付きが得られる。界面の化学反応の研究に携わる講演者が、研究者にどんな環境を作れば活気のある研究生活を送れるのか、という点について考えてみたい。